UP!

海外医療ドラマの世界から、再び秋田へ

高橋 奈央子（平成10年卒）

国際看護師を目指し、2008年にオーストラリアへ。きっかけは米国ドラマ「ER 救急救命室」。しかし、挑戦の先には、想像をはるかに超え、リアルで緊迫した世界の医療現場が待っていました。

そんな日常を発信するうちに、日本で疲弊するナースから相談を受けるようになり、改革を意識するようになったのです。

そこでまず、紆余曲折ありながらもオーストラリアでキャリアアップを果たし、数々のプロジェクトで現場の課題に挑みました。その過程では、私自身も病みかけるほどの困難に何度もぶつかりました。この経験を日本のナースに還元したい。そんな思いから2019年、看護管理者を支えるオンライン事業を立ち上げたのです。

そこから7年で積み上げた実績は、残業の大幅削減、離職率の改善、看護管理職の満足度向上など様々です。

かくして、日本の医療現場を改革することこそが「わが生の天職」と確信。昨年11月に秋田へ移住して会社を設立しました。

現在は、看護管理者への研修会・講演会、法人向けには人材定着を目的とした組織構築支援のために、全国を飛び回っています。目指すのは、看護・医療業界の改革を通じて、地元秋田を豊かにできる企業に育てることです。

そんな大きな目標に向かって、「敬天愛人 理想を高く、おのれを修めて世のためにつくす」。

皆さま、応援よろしくお願いいたします。そして、医療・介護の現場で人材採用や定着にお悩みの方、秋高愛を語りながら、ぜひ一度お話を聞かせてください。



たかはし・なおこ／株式会社ナースアップ代表取締役。秋田大学医療技術短期大学部看護学科卒。グリフィス大学看護学士取得。シドニー工科大学ヘルスサービスマネジメント修士課程単位取得。シドニーの公立病院でナーススペシャリスト・管理職として15年勤務。2025年に夫とともに秋田へ移住。経営者・管理者の情熱を発信し、求心力のある組織づくり支援が得意。

わが生わが世の天職いかに

大瀧 洋（平成11年卒）

総務省に入省し、5度目の地方赴任、令和8年7月から福井県の副知事に就任した。県の政策に幅広く関わり、これまでの地方での経験、国での経験やネットワークなどを駆使して、全力で県政発展に努める。

校歌の2番の歌詞を思い出す。「わが生わが世の天職いかに」。国家公務員として、少しでも地域のため世のために貢献できるのであれば大変光栄だが、立ちはだかる課題・人口減少は非常に厳しい。

日本の人口のピークは2008年で約25年後の2050年には1億400万人ほどになる。この数字は日本全体だが秋田県の総人口のピークは1980年。2050年には約56万人と推計され日本全体より遥かに減少ペースは早い。

また、これまでの25年間の出生数の変化に着目すると、日本全体では119万人（2000年）が67万人（2025年）と約4割の減少。同期間で比較すると、秋田県は9007人が3131人。個別の地域だと、秋田市は2724人が1284人、由利本荘市は703人が262人、五城目町は81人が13人という状況である。

将来、行政機能、生活や福祉のサービス、産業を支える人材をどう確保していくのか。現状でも人手不足に悩んでいるが、まだ“まし”なのである。出生率の向上などに加え、AI活用やDX、大規模化、集約化等省力化・効率化などのために必要なものを取り込むことに躊躇している余裕はないだろう。

厳しい現状の打破は困難だが、頑張っていくしかない。人の歩みを止めるのは、「絶望」ではない、「諦め」なのだから。



おおたき・ひろし/福井県副知事。由利本荘市生まれ。東京大学工学部都市工学科卒。03年総務省に入省。地方自治体への赴任（高知県、千葉県印西市、京都市、山形県）、内閣府での地方創生関係業務などに従事。総務省で過疎対策室長を務め、過疎地域の支援を担当した後、内閣官房で地方創生の基本構想、地域未来戦略に携わる。 今年7月より現職。